

タイ国

派遣期間 2014年4月～2017年3月

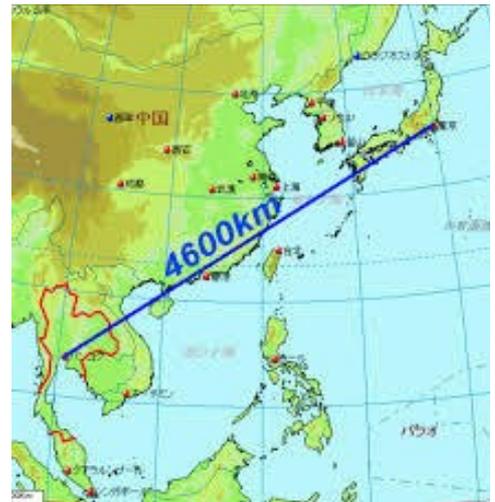
バンコク日本人学校 実践報告

～ほほえみの国から学んだ多くの事柄～

札幌市立盤溪小学校
教諭 藤井 達也

1 タイ、バンコクの概要

国名	タイ王国（立憲君主制）
言語	タイ語
面積	約51万平方キロメートル（日本の1.4倍）
首都	バンコク（約1,500万人）
人口	約6,800万人
民族	タイ族75% 華人14% その他
宗教	仏教95% イスラム教4%
通貨	バーツ（1バーツ=約3.4円）
気候	熱帯気候 雨季 乾季 暑季



タイ、バンコクの概要であるが、基本的な情報は、上記のとおりである。正式国名はタイ王国で、立憲君主制の国である。昨年（2016年）の10月にプミポン国王が亡くなり、その息子であるワチラロンコーン国王が即位した。プミポン国王は、1946年に即位し、国民の生活向上を考えた活動を数多く行い、国民から深く敬愛され絶大な信頼を得てきた。70年間という長期にわたり在位し、その存在はタイ国民の中に広く深く浸透しており、国の至る所に国王の肖像画が飾られていたほどである。また国旗にも国王の大切さが表れている。その意味は、中央の紺色が国王を表し、その外側の白が宗教である仏教、最後の赤が国民を表している。

使用言語は、タイ語である。タイ語の文法は比較的簡単なものであるが、声調が非常に難しい。日本語にはない声調があるため、日本人が発音したものはなかなか通じないこともある。また、タイ文字は、形を覚えることがとても難しいので、字を読んだり書いたりすることは大きなハードルである。

面積は約51万平方メートルで、日本の1.4倍である。日本よりも大きな面積の中で、人口は約6,800万人である。首都バンコクには約1,500万人が住んでおり、世界でも1、2を争う交通渋滞が激しい街である。日本とは、約4,600キロメートル離れており、直行便では、6～7時間程度かかる。新千歳空港からも直行便が出ているので、行きやすい国といえる。時差は2時間で、日本の方が早い。

民族は、タイ族が国民の大部分を占めている。その他、華人が14%ほどおり、残りは少数民族となっている。少数民族は、国境周辺に多く住んでいる。宗教は、国民の大部分が仏教徒である。日本の仏教とは異なり、上座部仏教である。イスラム教徒は4%ほどいるが、南部のマレーシアとの国境近くに多く住んでおり、独立をねらう動きも少なからずある。

通貨はタイバーツである。1バーツは約3.4円である。為替の変動があるので、3円～4円の間で変動している。

気候は熱帯気候である。日本とは違い、常夏の国である。その中でも、季節は大きく三つに分かれている。3月～5月の暑季、6月～10月の雨季、11月～2月の乾季となる。暑季は、最高気温が40度ほどの暑さとなる。雨季は、1日中雨が降るといことはほとんどなく、夕方などに突然スコールが降ってくる日が多い。雷を伴うことも多く、大雨により道に水があふれることも何度もあった。乾季には全くといっていいほど雨が降らない。湿度も適度でとても過ごしやすい季節である。12月の終わりの1週間程度は、最高気温が25度ほどとなり、涼しさを感じることもあった。

2 バンコク日本人学校の概要、特色ある教育

◆バンコク日本人学校の概要

【歴史について】

バンコク日本人学校は、二つの点で世界一であるといえる。まずは、歴史である。世界に88ある日本人学校の中でも、最も歴史が古い。タイ国内での日本人学校のもととなるものは、1926年、大正15年にバンコク日本尋常小学校として設立された。その後、1956年、昭和31年の1月に「在タイ日本国大使館附属日本語講習会」という名称で現在の前身となる学校がスタートした。その後、1974年、昭和49年7月24日に、現在の名称である「泰日協会学校」となり現在に至っている。開校してからは、61年たっているということになる。



【在籍児童数について】

次は、在籍児童生徒数である。こちらも世界の日本人学校の中で最も多い。開校当初は、28名の子どもたちからスタートしたが、現在は、児童生徒数が世界でも1、2を争う大規模校である。特に赴任初年度の平成26年度は、最大の人数（約3,000人）が通っていた。その後のタイ国の情勢などにより、多少減ってきているのが現状である。また、毎年約1,000名の入学・編入学、そして、それと同等の退学者がいる。子どもたちの入れ替わりが非常に多い学校である。例えて考えると、一学級30人が在籍するとして、新年度の4月には5名、2学期始業式に3名、3学期始業式に2名が転入してきて、退学は特に3学期に多いが、1年で10名以上が退学することになる。また、児童生徒数が多いので、当然教職員数も多く、200名以上がおり、職員室も三つある。

【校訓・教育目標について】

次は、バンコク日本人学校の校訓、教育目標である。「広い心で 明るく なかよく たくまし

く」である。これは、昭和37年9月1日に制定された。この校訓を受けて、教育目標が定められている。日本語による日本国内に準ずる教育を行うことが目的の日本人学校なので、教育目標も日本の学習指導要領が基本となる。学習指導要領を支える「生きる力」を身につけることができるように、「知・徳・体」のバランスのとれた力の育成を、バンコク日本人学校も目指している。

- ・「思いやりのある子（徳育）」
- ・「創造性を発揮し、積極的に学ぶ子（知育）」
- ・「心身の健康をつくる子（健康）」

さらに、日本国外にあるという特色を生かして、その三つの柱に

- ・「国際性豊かな子（国際性）」

を加え、四つの柱の教育目標のもと、全職員で子どもたちを育むように努めている。

【1日の生活について】

子どもたちの1日の生活は、通常の日本の学校とは異なる点も多い。基本的な1日の生活を見ていく。まずは、登校であるが午前8時までとなっている。3,000人の子どもたちの9割以上は、学校が委託しているバス会社でのバス通学となる。バスは全部で200台近くになる。バンコクの交通渋滞が理由で、子どもたちのマンションへのお迎えは7時前のところがほとんどである。早いところでは、6時30分前にはマンションを出発することもある。学校への到着も7時前になるバスも数台見られる。8時から朝学習の時間が始まり、1時間目開始は8時25分である。その後、2時間目、中休み、3時間目4時間目と進む。昼食は給食ではなく、お弁当である。その後、昼休み、清掃をして、5時間目の学習になる。5時間授業の子どもたちは、14時40分発のバスで下校。6時間授業の子どもたちは15時50分発のバスで下校となる。朝の渋滞と同様、夕方道路は激しい渋滞なので、この発車時刻を必ず守るようにしていた。日本との大きな違いは、登下校の仕方と時間、給食か弁当かということである。



◆特色ある教育

特色ある教育としては、大きく五つある。①学校行事 ②確かな力を育てる教育活動 ③日本人学校ならではの活動 ④特別支援教育の充実 ⑤キャリア教育である。

【学校行事について】

バンコク日本人学校の大きな特色ある学校行事として、交流学習会がある。タイの現地校との交流である。基本的に2学期のはじめごろ、毎年小学部も中学部も、近隣のタイの学校と交流学習会を行っている。子どもたちが、それぞれの国の文化を伝え合ったり、教え合ったりして、心を伝え合う交流を目指している。この交流会に向けて、タイ語の学習も行う。たった1日の数時間しか交流することはできないが、この日のためにたくさんの準備を行うし、この交流を通して子どもたちのタイ人への思いが変化したり、交流することの難しさや大切さについて学んだりする貴重な時間になっている。

次は、泰日協会学校大運動会である。小学部、中学部と別日開催で11月中旬に実施している。毎年、来校者の延べ人数が9,000人近くになる。11月中旬とはいえ、まだまだ暑い時期で、練習期間も雨季の終わりごろで、練習が雨により中断ということもよくあった。また、土の部分は水はけが悪く、教員が朝、総出で水の吸い取り作業をしたこともあった。



運動会の種目自体は日本と大きく変わりはないが、人数が多いので、子どもたちをどのように動かさなければならないかについては、相当に準備・計画が必要となる。児童・保護者の帰りのバスの発車時刻も決まっているため、遅くすることができないことも一つのプレッシャーである。

写真の様子は、運動会本番であるが、人工芝のコートの周りに200メートルの陸上トラックがある第2グラウンドを使用するが、その周りには、テントがずらっと並び、児童や保護者の待機場所となる。

ここまでは大きな行事となるが、それ以外にも日本と同様の各学年での現地学習や小学5年生はフアヒンへの2泊3日の宿泊学習、小学6年生はチェンマイへの3泊4日の修学旅行、中学2年生は4泊5日のシンガポールへの修学旅行などが行われる。

【確かな力を育てる教育活動について】

バンコク日本人学校では、教職員の専門性を生かした専科教員による授業をいくつかの教科で実施している。音楽科は全学年が専科での授業を行う。それ以外には、4年生以上の図画工作科、5年生以上の家庭科でも専科教員が指導している。また、小学部6年生からは教科担任制を導入して、より専門的な学習指導を展開している。中学校へのスムーズな連携という面もある。また、学習習慣の定着や心を育てる指導にも力を入れており、あいさつ運動は学校全体で毎日行っている。

授業時数を確保するためにも、土曜登校を行っている。小学部4年生と5年生は月に1回程度、小学部6年生と中学部は月に2回程度、登校日としている。平成29年度からは、小学1年生から土曜登校日が実施されている。

【日本人学校ならではの教育について】

まずは、日本語の保持と向上のため、小学部全学年、週1回朝学習の時間に「ことばの時間」という日本語指導を行っている。次に水泳指導である。常夏の国タイにある学校ということで、1年中水泳の授業がある。50メートルプールを使用して、担当教員とタイ人の水泳コーチが一緒になってグループ別の指導を行っている。小学部1年生から中学部3年生までの全学年に、タイ語の授業を週1時間実施している。日本語が堪能なタイ人教員が授業を担当する。勤務が長い教員は、40年以上も働き続けており、日本人学校の歴史をよく知っている。タイ語については、本校がタイの私立学校のため、タイ教育省から週1時間のタイ語の授業が義務付けられている。



英会話の授業は、小学1年生から行っており、小学部3年生からは週2時間ネイティブの英会話教師と日本人教師が協力して授業を行っている。

IT教育については、多様な場面、各授業等、教員、児童生徒が活用することでスキル向上を図っている。

また、タイにあることを生かし、生活科や総合的な学習の時間にタイの歴史や自然、文化についての学習を行っている。

【特別支援教育について】

大きな学校であるが、一人一人の子どもたちに適切に指導できるように、特別支援教育も充実している。学校全体で一人一人の様子を共通理解できるように、就学指導委員会や学びの支援委員会などを設置し、児童生徒への指導や支援を具体的、専門的に行えるようにしている。学校の1階には、ふれあいルームがある。ここは、特別支援教育アドバイザーとふれあいサポーターが常駐し、心の疲れや不安がある児童生徒のための「心の保健室」となっている。また、スクールカウンセラーがおり、児童生徒又は保護者の方々の心理的な問題への支援にあたっている。「なかよし学級」という特別支援学級が小学部に3学級ある。ここでは、特別な教育的支援を必要とする子どもたちが学んでいる。多くの日本人学校では、この学級の設置はないようだが、バンコク日本人学校では設置されており、通常の時間割と異なり、一人一人の実態に応じた時間割を編成している。ただし、中学校には設置されておらず、小学6年生で特別支援学級に在籍する児童は、中学進学に合わせて日本へ帰国するのが現状である。

【キャリア教育について】

キャリア教育の推進ということで、小中学部ともにみんなで夢について考える「ゆめ集会」を行っている。中学部では、進路啓発講演会や職場体験学習などの場も設けている。さらに、たくさんの高等学校関係者に来ていただく学校説明会も開催している。学校によっては、日本人学校を会場校として、海外入試も実施している。

【危機管理体制について】

タイは海外の中では、安全な国ではあるが、危機管理体制は日本以上に気を付けていることである。学校には、24時間態勢で警備員が常駐していて、昼間は警察官もいる。学校の敷地全体は、2メートルほどの高さの壁に覆われている。

また、学校外での不測の事態が起こることも考えられるため、様々な想定をしている。クーデターや洪水等が発生した時は、大使館や日本人会、タイ教育省から情報を得ながら、審議を進め、対応を判断している。緊急時の対応としては、臨時休校とする場合がある。また、学校に児童生徒がいて帰宅できる状況であれば、バス通学者については、全学年でのバス下校、自家用車・徒歩通学者については、保護者の方に迎えに来ていただくことになっている。帰宅が困難な場合は学校での待機となる。

実際には、平成26年度に起きたクーデターの際は、5年生がフアヒンで臨海学校を実施しており、帰校を早めるという措置をとった。クーデター翌日は、学校を休校措置とした。平成28年の国王崩御の際は、翌日登校させはしたが、2時間で全校一斉下校の措置をとった。また、イングランドサッカーのプレミアリーグでレスターシティが優勝した際には、オーナーがタイ人ということもあり、バ



ンコク市内でパレードをすることになった。このときには、短縮授業にして下校させた。バンコク市内は渋滞が激しい街なので、そのような対応を行った。

緊急時の各家庭への連絡はショートメッセージサービスや電話による対応を行う。

【入校に際して】

危機管理に関連して、校内には学校関係者以外を入れないように細心の注意が払われている。保護者は、原則的に保護者証がなければ校舎に入ることができない。もし、保護者証を忘れた場合は、身分証明書などで確認をすることになる。保護者証は、児童生徒の両親のみ発行可能である。また、保護者以外の来校に関しては、事前予約が必要で、当日来校した際に顔写真入りの証明書を守衛に預け代わりに VISITOR カードを受け取ることで入校を許可している。児童生徒の安全のために校内の見学や突然の訪問者等は、基本的にお断りしている。これは、祖父母や親族に対しても同様の対応である。校内に入られた後は、不審者と見分けるために保護者証などを首からさげる、胸に付ける等、見える位置に付けるよう協力していただいている。

また、子どもたちを迎えに来て連れて帰るときには、職員室で「同伴下校許可証」を受け取って警備員に見せることになる。この対応をしなければ、子どもを学校外へは連れ出せないようになっている。そのため、「同伴下校許可証」を受け取るために、子どもと一緒に小学部は小学部第1職員室へ中学部は中学部職員室へ来なければならない。いろいろと手数をかけることにはなっているが、海外での児童生徒の安全のための措置であり、ご理解・ご協力をお願いしている。

3 在任中の教育実践

在任中の3年間は、1年担任、3年担任、3年学年主任を担当した。その中での教育実践として、交流学習会と現地学習の実践について記述する。

【交流学習会】

交流学習会は毎年9月に行われている。1年目の1年生の交流学習会は、私立大学のカセサート大学付属小学校と行った。この学校は、1学年の児童数が400人以上と大規模である。施設としては、大学のキャンパス内に設置されていることもあり、とても恵まれていた。

2・3年目の3年生の交流学習会の相手校はバンコク日本人学校に近いダラカーム校であった。この学校はカセサート校とは異なり、小学校だけの学校であり、1学年の児童数は60人程度と日本の公立小学校と同程度である。

この交流学習会を行うにあたっての教員の準備は、年度当初から始めている。学年主任と交流学習会担当教諭が中心となって計画を立て、タイ語教諭に通訳となって間に入ってもらい、相手校と連絡を取り合う。その後、実際にそれぞれの学校へ担当学年教諭全員で行き、相手校の教諭と打合せを行う。さらには、活動場所を見たり、活動内容を確認したり、簡単な会食などを行って親睦を深める。

交流学習会に向けての子どもたちの準備は、本格的には2学期から始めることとなる。総合的な学習の時間での学習で、タイの友達と交流するために必要なものを準備したり、どんなことをしたらよいかを計画したり、毎週1度のタイ語の授業ではどのようなタイ語を実際に使うかを考えて練習した

りする。日本人学校の子どもたちから日本の文化を伝えるものとしては、新聞紙で作るかぶとや折り紙で作るメダルの作り方であった。そのために、どのように教えたらいいかを考えて、タイ語を使っての練習を重ねた。他には、スポーツ交流や、日本語とタイ語の両方の歌詞がある谷村新司さんの「思いやりの花」の歌、歓迎のセレモニーのためのリコーダー、日本の舞踊披露のための沖縄の「エイサー」を行ったりした。

交流学習会当日は、実際の活動時間としては4時間程度である。子どもたちは初対面であり、なかなか言葉が簡単には通じない中で、それぞれの活動を通してコミュニケーションを交わしていく。一緒に文化を教え合ったり、活動を行ったりする中で、友情が育まれていった。

交流学習会の前後でアンケートを子どもたちにとると、「タイの国が好きか」や「タイ人のことが好きか」などの項目で、大きな変化がある。もともと好きな子どもたちはさらに好きになり、それまであまりよいイメージをもてていない子においても、実際に触れ合う活動を通して、好意的に変化していく様子がたくさん見られた。実体験として外国人と触れ合うことのすばらしさを感じられたことは、これからの子どもたちの人生において、必ずやよいものとなるだろうと感じている。

【現地学習】

2年目、3年目の3年生社会科校外学習では、「マックスバリュ・タイランド」と「タイ味の素」に行かせていただいた。この2社はご存じのとおり、ともに日本からタイへ進出した企業である。

毎年恒例のようにこの2社には、3年生の現地学習でお世話になっている。現地学習に向けての準備は年度当初から行う。学年主任とそれぞれの現地学習担当者が計画を立て、それぞれの会社の担当者と電話やメールでのやり取りを行う。両社とも担当者は日本人が行ってくれるので、とても心強かった。さらには、担当者が学校に来てくださって打合せをしたり、実際に現地へ行って学年教員で下見をしたりして、現地学習当日を迎える。担当者は日本人でも、そこで働くのはほとんどがタイ人なので、どのように見学するのかについて、日本以上に入念に決めておく必要がある。

9月に見学に行かせてもらったのが「マックスバリュ・タイランド」である。日本のイオンを母体とした会社である。30年ほど前からタイに進出しており、今では、タイ全土に約80店舗も構えている。これだけの規模の店舗展開ということもあり、ターゲットは日本人というよりは、タイ人だということだった。しかし、日本人が多く住んでいる地域の店舗では、できるだけ日本人にも来てもらおうと日本の品物を取り入れることもしているようである。また、これは、タイ人富裕層で日本に興味をもっている方にも購入していただけるようで、積極的に展開しているそうであった。

社会の単元は、「わたしたちのまちにある店」である。スーパーマーケットの売り場の秘密探しやバックヤード見学をさせてもらいながら、どのようにスーパーマーケットで働く人々が工夫しているのかについて学ばせてもらった。いつもは、通常の店舗に日本人がいることはないそうであるが、この現地学習のためにその店舗に多くの日本人スタッフや日本語が話せるタイ人スタッフを集めてくださり、日本人学校の子どもたちのために準備をしてくださる姿勢には、本当に感謝の思いでいっぱいである。

さらには、「ものを育てたり、作ったりしている人たち」の単元の学習では、「タイ味の素」に行か



せてもらう。日本の味の素が母体となって60年近く前にタイに進出している。タイでは、タイの食糧事情に合わせた商品を製造している。主力商品は、「ロディー」というタイ料理を作る際の調味料である。味の素を作るノウハウがあるからこそ、タイ料理のおいしさを生み出す調味料も開発できるよう



である。そして、これは、年々製造量を増やしているそうである。最近のタイ人の収入が増加していることに伴って、料理を家庭ですることが増えており、「ロディー」の生産も増産体制を考えているそうであった。缶コーヒー「バーディー」は、タイの缶コーヒー市場の半分程度を抑えている商品である。タイのコーヒーと言えば、「バーディー」と言うくらい、知られた製品である。日本の味の素には、コーヒーというイメージはあまりないが、タイでは堂々のトップブランドである。味はというと、タイ人好みの甘みのとても強いコーヒーである。日本人が飲むと、甘すぎると感じてしまうほどの甘さである。そして、日本へ輸出している「麻婆豆腐」である。タイから輸出しているものは、日本全体の味の素の「麻婆豆腐」販売量の5%程度と実際はあまり多くはなかったが、タイで安くおいしく手に入る鶏肉や豚肉、そして、日本に比べると安い人件費によって、安定して生産できるようである。

工場見学では、「麻婆豆腐」が作られるラインを見させてもらった。日本の食品工場同様、安全面や衛生面に最大限配慮しながら、おいしい品物になるように作られる様子を見させてもらった。またこれは最初のマックスバリュと同様であるが、その工場にはいつもいない日本人スタッフもタイ国内から集めて、日本語での説明をしてくれるように準備してくださり、こちらも本当に感謝の気持ちでいっぱいであった。

子どもたちは社会科の学習もしているが、日本企業が海外に進出して、その地で発展していているという、日本のすばらしさについても実感する現地学習となっている。

4 派遣国の生活全般にかかわって

私の人生の中で初の海外生活である。派遣されたのは4月7日。新千歳空港へ向かう高速道路は吹雪だったのが、東京は桜の見頃で、タイに着いたら暑季とって最も暑い時期であった。40度近くの気温と猛烈な湿度が、北海道で冬を過ごしてきた自分にとって、本当につらいものだった。この自然環境の変化だけでなく、衣・食・住・文化などなど、全てのものが日本とは違い、カルチャーショックを受けたものばかりであった。また、そのショックは決して悪いものばかりではなく、すばらしいものも多くあった。

タイで出会った多くの人々との出会いもすばらしいものだった。タイは微笑みの国といわれる。タイ人は笑顔にあふれ、子どもにもとても優しい。親日の国でもあり、日本人に対しても温かな対応をしてくれた。タイで出会った日本人とも素敵な思い出をたくさんつくることができた。

今改めて振り返ると、派遣されていた3年間は自分の人生において本当に貴重な時間であった。タイにいたからこそ、タイに住んでいたからこそ、日本人学校で働いていたからこそ多くの思い出・経験が生まれた。これらをこれからの教員人生に生かしていかなければならないと強く感じている。